保育士志望学生の事例動画省察の構造に関する研究

佐近慎平[1)]、西原康行[1)]
1）新潟医療福祉大学 健康スポーツ学科

【背景・目的】 教育現場の問題として、初任者を含めた現職研修の在り方、実践的指導力の内容とその形成が取り上げられる。教員の職能成長過程に応じた指導力量の充実を考えることは、それらの課題解決に役立ち、省察的実践家、実践的指導に関わる者の資質向上に繋がる。

実践的指導力形成には、実践場面に参与観察し理解を深めることが必要である。多様な場面での思考経験は蓄積され、実践知が形成される。主任保育士のそれは「場」の流れや動きに直観的に対応し、目標達成へと導く。藤岡（1988）は生き物のような授業のために、教師には余白が必要であると述べている。幼児教育が環境による教育である以上、保育者は、環境構成に加え、「場」を可視化し、その幅と深さを理解する必要がある。一方、保育評価は、保育者の活動、幼児の発育発達、保育方針や目標が挙げられる。腰山（2007）は、「保育現場では、様ざまな保育が展開されている現状を踏まえ、幼児の成長を保証する保育をめざして、保育方法の発展には、教育工学の手法を手掛かりとして、観察をより客観化する必要がある」、また、「教育工学的手法には、理論的・分析的・言語的である点を特徴とし、保育の特徴である非理論的・全体的・直観的・非言語的な要素への観察や分析を有用である」とも述べている。

【方法】 主任保育士 12 名を対象に事例動画を視聴し、導入・メイン・結びの場面で止め、状況認知を抽出（一斉ストップモーション法：10 分程度）。主任保育者の状況認知を「幼児の様子」「指導技術」「指導内容（ねらい）」にカテゴリー化し、セグメント表を作成した。学生の力量形成過程、深層化学習過程、個性化の抽出のために、以下の手順で実施した。事例動画視聴は同様の手順で 2 回行った。2 回目の状況認知は、新たな認知を抽出した。その後、主任保育士の状況認知表と照合し同一事象認知を抽出。主任保育士の状況認知表から得られた新たな認知を抽出した。状況認知をカテゴリー化するために、質的研究（SCAT：大谷 2019、佐藤 2008）、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA：木下 2005、GTA：戈木 2016）を参考に第一著者がコード化した。カテゴリー化、深層化の基準設定は、第一著者と第二著者が行い、共同研究者と検証した。また、共同研究者は、教師教育を専門としている。本研究は新潟医療福祉大学の倫理委員会の承認（承認番号：17897）を得て行った。また、ヘルシンキ宣言に則っており、実験開始前に被験者に本研究を口頭と書面にて十分に説明し、同意を得た上で行われた。本件を実施するにあたり、利益相反はなかった。

【結果】 データは幼児の様子（Teacher knowledge about preschool children）、指導技術（Teacher knowledge about pedagogy：2 領域）、指導内容（Teacher knowledge about subject matter：3 領域）に分類した。幼児の様子は、カテゴリー【幼児の主体的行動】、コード＜取り組み方の差はあるが指示には従う＞、＜素早さ・正確性・静かに動きを止める＞、＜喜び＞、＜期待・緊張感・集中＞、＜課題に対する身体への意識の集中＞、＜達成感、途中参加：楽しさが先導＞、＜保育者の介入への期待＞、＜取組み方による喜び・達成感の差＞に分類した。指導技術は、カテゴリー【主体性を誘う技術】、コード＜前後左右反対＞、＜歌と動き＞、＜小さい声・惹きつける＞、＜物語の世界観を演出＞、＜触れる・声がけ＞、＜課題の達成・喜び・共感＞、＜効果的な手順＞、＜間＞、＜テンポ＞、＜静と動＞、＜途中参加を誘い：主体性の尊重＞、＜途中参加の誘い：楽しさが先導＞、＜途中参加の誘い：強制しない＞、＜注意を集める＞、＜主体性の尊重＞、＜模倣しやすい見本＞、＜途中参加の承認＞、＜声のトーンの調節でメリハリをつくる＞、＜足音を演出し終結を表現＞に分類した。

【考察】 本研究では、事例動画から状況認知し、主任保育者の状況認知を省察学習した結果、学生の多くは、1 回目の視聴では、第一に幼児の様子から場を読み取ろうとしている。学生が最も認知した指導技術【主体性を誘う技術】＜触れる・声がけ＞「全員まんべんなく触れて確かめる」は、幼児一人ひとりの自由な活動を保障する、機会均等への意識の高さが伺えた。次に、指導技術【主体性を誘う技術】＜途中参加を誘い：主体性の尊重＞「あえて「急いで！」とか「石になって」とか言わずに、こども自身でできるように考えさせている」や指導技術【主体性を誘う技術】＜途中参加の誘い：楽しさが先導＞「急がせるのではなく楽しいことを行っているという期待を持たせて声を掛ける」は、機会均等を第一に考え、参加を促す声がけや注意を優先することに加えて、主体性を尊重した機会均等の確保、見通しを立てた主体性の育成というフレームが増設されている様子が伺えた。

【結論】 保育士志望学生の力量の形成を主任保育士との異事象認知を深層として可視化した。保育士志望学生は、第一に幼児の様子から場を読み取ろうとしており、幼児一人ひとりの自由な活動を保障する、機会均等への意識の高さが見られた。深層は、小さい声で話すための予告動作をあげており、子ども達に小さい声を声のトーンの調節で表現するに加えて視覚的に伝えていることに着目していた。

【文献】

1) 大谷尚（2019）質的研究の考え方，名古屋大学出版会，名古屋
2) ドナルド・A・ショーン，監訳柳沢昌一（2009）省察的実践とは何かープロフェッショナルの行為と思考ー，鳳書房，東京